

酉爲危、主杓戌爲成、主少德、亥爲收、主大德、子爲開、主大歲、丑爲閉、主大陰、今の曆に用る所、中段といふものは是也、今圖を作りて見るに便す、寅建、卯除、辰滿、巳平、午定、未執、申破、酉危、戌成、亥收、子開、丑閉

〔閑田次筆〕今の曆の上段に、開閉など記せることを、中段といひならはすは、貞享以前の曆には、支干日並の上にありしゆゑ、今の上段が中段になりしなりと、予が若きときに、老人の話なりし、

〔日本後紀二〕嵯峨弘仁元年九月乙丑、公卿奏言、謹案大同二年九月廿八日詔書稱、日者虛傳、千妨輻湊、占人妄告、萬忌森羅、又大會小會之言、歲對歲位之說、天恩發於五辰、將軍行於四仲、斯等並出、堪輿雜志、非舉正之典、宜據賢聖格言、一除曆注者、臣等商量、曆注之興、歷代行用、男女嘉會、人倫之大也、農夫稼穡、國家之基也、伏望因順物情、依舊具注、

〔佛國曆象編三〕曆法論皇國曆首三鏡及八將神等本梵曆、皇國曆首、揭歲德八將神等者、原本印度、故梵天火羅九曜及七曜攘災訣、並羅喉名黃幡、計都名豹尾、安倍晴明撰述、篋篋內傳、專述天竺傳來之興起、殊標三鏡於曆首、以顯吾顯密之深致、可謂深信大士、篋篋五卷、章々該羅佛乘、包括支那陰陽運氣、雅貫攝神道亡論、今詳國曆用梵曆過半、

〔玉禪八〕天皇の天の下治め給ふと撰びて、定しめ給へる曆神の、幸災ある事などに於ては、決めて其驗ある事なり、此によき因なれば、少か其由を云むに、謂ゆる八將神の第一に、大きい某方此方にむかひて萬よし、但木をきらすと出し給ふ大さいは、大歳にて、其年の君位に立る方なり、抑曆法の事は、我が神世より、謂ゆる眞曆の外に、皇國固有の御曆法ある事は、已詳かに考へ定たる説あれど、此處に盡し難ければ、此は暫く措て、別に委く記せる物、今は唐土の曆書等の説に依りて考ふるに、歳星またの名は、木星の精氣の建し宿る方位なるが、此方に向ひて、木を伐らすと云ふり、衆殺の王たる方として、何事も此方に向ひては行ふべからぬ凶方の第一と立て、其祟いと嚴な